

# 今昔物語

山や海に囲まれ、京築地域の中核として人が行き交い、歴史と文化が育まれてきた行橋市。昔懐かしい行橋の風景や町なみの、「今」と「昔」をご覧ください。

## ～ Vol.033 旧百三十銀行行橋支店

7月1日は「銀行の日」です。これは、明治26年（1893）に普通銀行に関する法規の基礎となった「銀行条例」が施行されたことを記念して制定されました。

我が国の近代銀行制度は、明治5年（1872）に制定された国立銀行条例から始まります。この制度の導入には、欧米の銀行制度を研究した渋沢栄一が大きく尽力しました。明治6年（1873）開設の第一国立銀行をはじめ、全国に153の国立銀行が誕生し、紙幣発行や企業への融資を通じて産業発展を支えました。また、外国為替業務を担う横浜正金銀行も設立され、通貨の統一と金融の安定を担う日本銀行などとともに日本の近代金融制度の基礎を築きました。

1914年頃 / 大正3年

### ■完成直後の百三十銀行行橋支店

行橋では明治11年（1882）に第八十七国立銀行が仲津郡大橋村に開業します（のちに行事村に移転）。福岡県下では、福岡の第十七国立銀行、久留米の第六十一国立銀行に次ぐ3行目の開業でした（のち柳川に第九十六国立銀行が開業）。

第八十七国立銀行の設立に中心的な役割を担ったのは、柏木黙二（第6代柏木勘八郎）をはじめとする大橋・行事の商人と旧豊津藩士族でした。しかしながら経営は不安定で、明治35年（1902）には、大阪の（株）百三十銀行に吸収合併。行事の店舗は百三十銀行行橋支店となりました。その後、大正3年（1914）、大橋の現在地に新築移転します。



▲市内でも希少な大正期の洋風建築。外観はルネサンス風であるが、幾何学的装飾を多用した「セセッション様式」がモダンな印象を与える。

2026年 / 令和8年

### ■旧百三十銀行行橋支店（行橋赤レンガ館）

百三十銀行行橋支店として開業したこの建物は、銀行の合併や組織改編に伴い、安田銀行行橋支店、十七銀行行橋支店、福岡銀行行橋支店、行橋京都信用組合本店へと姿を変えながら利用されてきました。平成9年（1997）、北九州信用組合の解散をもって、銀行建築としての役割に幕を下ろします。

平成10年（1998）、行橋市が元行橋商工会議所会頭、平知信行さんの寄付金を元に土地と建物を買収。平成12年（2000）に「旧百三十銀行行橋支店」として市有形文化財に指定（平成15年に県指定）、改修工事を経て、平成14年（2002）に市民ギャラリー「行橋赤レンガ館」としてオープンします。



▲行橋市歴史資料館、守田蓼洲旧居とともに、行橋市の文化財活用の中核施設として、その歴史的価値を未来へとつないでいる

改修工事の際には屋根裏から棟札が発見され、日本近代建築の礎を築いた建築家・辰野金吾が関わっていたことも明らかになりました（詳しくは令和8年広報ゆくはし3月号P22参照）。令和2年（2020）には向かいにリブリオ行橋が開館し、それに合わせて行橋赤レンガ館も改修を実施し、指定管理者による運営を開始。現在はギャラリー＆カフェとして年間約1万人が訪れ、市民の憩いと交流の場として親しまれています。これからも歴史的価値と地域に根差した役割を大切にしながら、人々に愛される文化交流の拠点として、その魅力を未来へ受け継がれることを願っています。